

原発 ゼロ にむかって

2012年9月5日 No.31

<http://www.tokyominiren.gr.jp/>

編集・発行／東京民医連事務局 tel: 03-5978-2741 fax: 03-5978-2865 mail: sien@tokyominiren.gr.jp

医学生が「原発問題から医療と生活を考える」

8月16日～18日に岩手県・花巻温泉にて第33回「民医連の医療と研修を考える医学生をつどい」(以下「つどい」)が開催されました。今回のつどいは「原発問題から医療と生活を考える～医学生が本気出して考えてみたらどうなる!?～」をテーマに、様々な講演・学習・議論が行われました。参加は全体で433人、東京からは医学生16人、医師7人、共同組織の方2人が参加しました。原発事故から1年が経過してもなかなか前進しない原発問題に、今まで政治活動に消極的だった日本国民が声を上げはじめている中で、多くの学生実行委員から、「昨年取り上げられなかったこの国民的課題と向き合いたい」という意見が上がり、今回のテーマとなりました。

医療者になる者として、どのように原発と向き合っていくか

【1日目】 フォト・ジャーナリストの森住卓さん講演。原発問題が全く収束していないこと、震災直後の3月13日に福島県双葉町に入り取材を行った映像や、壊滅的被害を受けた福島県の酪農家の実態が紹介されました。手塩にかけて育てた牛を自ら処分しなければならなかった酪農家の方のお話は心を打ちました。



【2日目】 午前中は、3人のシンポジストを招き、福島原発事故による影響を三者の立場から語っていただきました。

福島県農民連の三浦草平さんは事故後の避難の足跡や、自分たちの生活がどのように変化したか。桑野共立病院MSWの朽木暁美さんは、事例を交えながら、事故による不安が健康へ被害を及ぼしている現状について。宮城・坂総合病院の矢崎とも子医師からは、医療者・母親の立場からお話していただきました。福島原発問題はまだまだ終わっていないこと、

原発問題をはじめとする社会問題に対して、医学生が自分自身の問題として捉え、行動していくことの大事さを伝えました。

午後は分科会形式で行われました。その中の一つ「大きく間違わずに福島で暮らす。事故後半年の視点から」では、福島県民医連・熊谷智さんが子どもを持つ父親として、「いま、福島でできない当たり前のこと(砂場遊び、虫取りなど)をできるように行動していきたい」「原発事故によって当たり前のことが当たり前じゃなくなった。そういう人たちが元の生活に戻る手助けを、私たちは医療者として行っていかなければ」と語りました。



<参加者の感想>

- ・福島の話が聞いて良かった。グループ・ディスカッションでは色々な人がいて色々な視点があるのを学んだ。(東北大2年)
- ・今回初めて参加しました。こんなにつどいに多くの学生が参加しているのに驚き、他大学の学生とディスカッションが出来て貴重な体験ができました。被災地の人のお話が聞いて良かった。(順天堂大3年)
- ・これまでに3回参加しましたが、今回、いちばん感動しました。討論を通じて学生が目に見えて変わっていくのに頼もしさを感じました。(共同組織の方)
- ・事実をきちんと知る事はとても大切。水俣や原爆の問題と同じで、今後原発の問題でも一人ひとり小さな声でも挙げていかないと崩壊になってしまう。今後もディスカッションしていきたい。(小豆沢病院・佐藤栄三郎Dr)
- ・傍観者としてどんなに情報を集めても何が正しいかという確信は持てない。自分が行動してそこに足を踏み入れ、困難な人や困難なところに行って、初めてわかるものだと思います。今回のつどいを通して、皆さん自身が様々な問題について真剣に考え、向き合い、行動される事が、僕らにとっての希望です。(中野共立病院・谷川智行Dr)